

有明海の堆積環境と貝殻遺骸群集変化

Depositional environment and dead shell assemblage changes of Ariake Sound

市原 季彦 [1]; 塚野 香織 [2]; 下山 正一 [2]

Toshihiko Ichihara[1]; Kaori Tsukano[2]; Shoichi Shimoyama[2]

[1] 復建調査設計 ; [2] 九大・理・地球惑星

[1] Fukken Co.,LTD.; [2] Earth and Planetary Sci., Kyushu Univ

<http://geoslicer.com>

有明海は、近年漁業不振が問題視されている。そこで、有明海の堆積環境と貝殻遺骸群集の変化を調べた。

調査は、ジオスライサー等を用いた鉛直方向の地層採取及び、表層の採泥を実施した。堆積物中の貝殻遺骸群集を解析、長期的な環境変遷を調べた。調査は、砂質干潟（川副）と泥質干潟（東与賀、白石）、砂泥干潟（荒尾）を対象とした。

砂質干潟が見られる川副沖では、アサリおよびシオフキが多く生息している。その遺骸群集の Cv-Fr 解析を行った結果、表層での生息中心は潮間帯砂州の頂部付近であることが判明した。鉛直方向で調査を行うと、潮間帯砂州頂部でも下位ほど現地性程度が低下していくことが判った。堆積相を検討すると、潮間帯砂州は筑後川デルタシステムの前進に伴って形成されており、鉛直方向では泥質となり、砂州堆積物が見られない。

また、荒尾において見いだされた 1792 年の「島原大変肥後迷惑」津波堆積物は、川副においても確認された。また、その他の年代値の検討から、環境の変化は過去 200 年間くらいの出来事であることがわかった。

推定された堆積年代から判断して、表層付近でアサリがみられる荒尾や川副では、少なくとも過去 200 年以前にはアサリは殆ど生息していない。これは、堆積環境が大きく変化したことを示唆する。また、東与賀では、外来種と考えられるヒラタヌマコダキガイが優占種となっており、在来種への影響が懸念される。